

(資料紹介) ジャン＝バティスト＝クロード・リシャール・
サン＝ノン 『ナポリ王国とシチリア王国の
ピトレスクな旅あるいは描写』

吉 田 朋 子

1 はじめに

18世紀、イタリア旅行が大ブームであった。イギリスの富裕層による大陸旅行「グランド・ツアー」に象徴されるように、ヨーロッパ全土から人々がイタリアに押し寄せた。その結果、ガイドブックとしての役割も期待されつつ旅行記や解説書が盛んに出版され、一つのジャンルを形成することになる。

中でも豪華さで知られるのが、ジャン＝バティスト＝クロード・リシャール・サン＝ノン、通称サン＝ノン師 (Jean-Baptiste-Claude Richard Saint-Non, dit Abbé de Saint-Non, 1727–1791) による『ナポリ王国とシチリア王国のピトレスクな旅あるいは描写 (*Voyage pittoresque ou Description des royaumes de Naples et de Sicile*)』である (以下、本書または『ピトレスクな旅』と呼ぶ)。1781年から86年にかけて出版された大型の書物 (約51×33cm) である。第4巻が上下に分かれているため、実質的には5冊で構成される。日本国内では国立西洋美術館に所蔵されている¹⁾。また、ハイデルベルク大学のサイト等でデジタル化されたデータを閲覧・ダウンロードすることができる²⁾。

本書の最も大きな特色は、当時はまだ訪れる人の少なかったイタリア半島南部やシチリアを詳述していること、そして多数の図版を駆使していることである。この地域はマグナ・グラエキアとよばれる古代ギリシア植民地を擁する。内容は自然と遺跡に彩られた南イタリアの景観への賞賛と古典古代文化への憧れ、さらに自然科学や民俗学その他多種多様な興味が絡み合っており、単なるガイドブックとは一線を画するものとなっている。18世紀研究全般で言及され

る頻度の高い書物でもあるが、その詳細にまで踏み込んで紹介されることは少ない。また、図版が豊富とはいふものの、あくまでモノクロームの版画であり、しかも展覧会などでは見開きで展示するしかないため全容も把握しづらく、その価値はなかなか伝わりにくい³⁾。本稿では、この書物の出版の経緯、豪華であると評価される理由、全5巻の章立てを確認し、一部を翻訳することを通して、特に後半部分の記述の特徴を考察したい。

2 出版の経緯・特徴・内容の概観

サン・ノンは、1755年に教会禄を得て1758年に abbé commendataire（修道院外聖職者大修道院長）に叙任された⁴⁾。しかし、名目上の聖職者であり、むしろ18世紀の著名な芸術愛好家たちの一人として知られる。収集活動やメセナだけではなく、自身でも油彩や版画を手がけており、ベンジャミン・フランクリンがバリーに滞在していた時期には1778年に自宅に招いて、版画技法の一つアクアティントを実演披露している。芸術家たちにも敬意をもって親しく付き合うタイプのパトロンであった。1759年から1761年にかけてイタリアに滞在し、特に帰国の際には画家フラゴナールと一大周遊旅行をしている。

サン・ノンは多彩な文化活動を繰り広げていた徴税請負人バンジャマン・ド・ラポルド、自分の兄のリシャール・ド・ラ・ブルテッシュとイタリアに関する書物を出版することを計画する。1777年6月には雑誌『メルキュール・ド・フランス』に告知が掲載された。しかし計画が持ち上がった時点で、彼ら自身が南イタリアに行くことはできず、その代理としてラポルドが若き日のドゥノンを紹介した⁵⁾。ドミニク＝ヴィヴァン・ドゥノン（Dominique-Vivant Denon, 1747-1825）は、のちにナポレオンに仕え、ルーヴル美術館初代館長となる人物だ。現在もルーヴル美術館の「ドゥノン翼」にその名前を残す。ドゥノンは1777年にイタリアに赴き、建築家ルナールとデブレ、画家のシャトレとともに南イタリアとシチリアを旅行し、報告書や素描を送った。サン・ノン兄弟は活動資金として30000リーヴルを提供している。ラポルドは1783年には計画から離脱し、その後はサン・ノンが残された作業をすべて引き受けることとなった。しかも、その後大きなトラブルが発生する。ラポルドがドゥノンの日記を別個

に出版してサン・ノンを剽窃者として陥れようとしたのである。

確かに、本書の大部分はドゥノンの文章がもたになっている。しかし、当時の基準ではサン・ノンの方法は正当なものだった。しかも、本書は単にドゥノンの日記をそのまま出版したといった低レベルのものではない。文章の確認、様々な参考資料の引用、デッサンの版画化の手配など、大量の仕事をこなさなければならなかった。毎朝6時に起き、体力回復のためにロバの乳を飲みながら一大出版事業を完遂したサン・ノンの功績は誰も否定することができないだろう。

『ピトレスクな旅』の重要性の一つは南イタリア、シチリアを扱ったことにあり、それは第1巻序文に明確に表明されている。「イタリアを旅したことのある人すべてがローマその他の都市を見物するような調子でナポリまでも訪れたわけではないだろう。さらに、ナポリ王国の端まで足を延ばすような好事家はいっそうわずかしかない。カラブリアはイタリアのすばらしい地方であるのに、長い間未開で人が住まず、山賊に乗っ取られており、旅行者にとっては恐怖だと思われてきた。そこをあえて横切ろうなどという大胆な人はわずかだ。シチリアを見物し踏破する人はさらに稀である。二人三人の旅行者がいくらかの報告を伝えてくれているが、この土地はあらゆる面で興味深いにも関わらず、今日でもほとんど知られていない」⁶⁾。

実際、ナポリやその近郊のポンペイより南のイタリアに関する情報は極端に少なかった。たとえば、ジェローム・ド・ラ・ランド (Jérôme de La Lande, 1732-1807) の旅行記『1765年から66年にかけてのあるフランス人のイタリア旅行』⁷⁾ はイタリアのガイドブックとして広く流通したものだが、南部は網羅されていない。このガイドではアルプスを越えてトリノ・ミラノやフィレンツェを経てローマに至り、ナポリ・ポンペイのあたりまで南下したところで再度北上してヴェネツィアを経て帰国という周遊ルートが提案されている。

また、本書のもう一つの特徴は惜しめない図版の使用にある。これは上記のラ・ランドの著作と比較すれば、一目瞭然である。ラ・ランドの旅行記は本文は8巻であり、これに地図編として、主要な都市の地図やいくつかの有名な見どころの図版も8点付随する。この地図は非常に分かりやすいが、図版の芸術的価値はそれほど高くない。本編8巻は文字情報のみで構成されている。ラ・ラン

下のガイドは小型本で、持ち運びを想定された造りになっており、そもそもの目的が違うとはいえ、こういったものと比較すると『ピトレスクな旅』の豪華さが際立つ。

また、南イタリアを対象とし、かつ図版が充実した書物として、ジャン＝ピエール＝ルイ＝ローラン・ウーエル (Jean-Pierre-Louis-Laurent Houël, 1735-1813) の著作『シチリア・マルタ・リパーリのピトレスクな旅』が同時期 (1782-1787) に出版されている⁸⁾。大型かつ図版を多用した4巻からなる豪華本であるが、こちらと比較しても本書は圧倒的に贅沢である。ウーエルの図版は質は高いものの装飾的な要素がまったくなく、説明的な役割に徹しているのに対して、サン・ノンの著作には採算を度外視したような図版が大量に投入されている。装飾的にレイアウトされたメダルの描き起こし、章冒頭の挿絵など、本文の内容を補完する役割をもつものの、必ずしも本文理解に必須ではない図版が大量に使われているのだ。また、折り込み地図・鳥瞰図・書き起こし図など、多様な図解技術を駆使している。

全巻の内容は以下の通りである。各巻には一応の目次が付随しており、これを利用してまとめた。しかし、この目次に入れられていない内容も若干あるため、目次を基本としつつも、本文を確認しながら内容を整理した。地名については、原文はフランス語だが、分かりやすさを優先して現在のイタリア語を採用した。ページ番号については煩雑になるため省略した。

第1巻 1781年出版

王妃マリー・アントワネットへの献辞、序文、第1巻所収の装飾模様の説明
目次、フロルスからの引用、ナポリの絵画について、地図 (ナポリ王国、シチリア王国、マグナ・グラエキア)

ナポリ王国とシチリア王国の歴史

マルセイユからナポリへの旅

第1章 ナポリ王国の地勢・地形図・ナポリの眺望

第2章 ナポリの聖堂・宮殿・墓と市内の眺め

第3章 ナポリの聖堂と宮殿に所蔵されている重要な絵画

- 第4章 ナポリ出身の著名な詩人・音楽家
- 第5章 ヴェスヴィオス山の眺めと記述
- 第6章 ナポリの慣習・個性・衣装・政体・商業・特産品

第2巻 1782年出版

マルティアリス『寸鉄詩』からの引用、序文、第2巻所収の装飾模様の一覧
目次、第2巻所収の装飾模様の解説

第7章 ヘルクレネウムの発掘、出土した古代の絵画

第8章 立体像・壺・祭壇・三脚台・燭台・家具そのほかの古代の遺品、ヘルクレネウムの遺品の輸送について

第9章 ヘルクレネウムの劇場、サーカス・演劇など古代の様々な見世物について

補遺 遺物断片・仮面を表現した青銅や彫石

第10章 ポンペイの遺跡と遺物

第11章 火山の起源について、フレグレイ平野の古代の遺跡、ポッツォリ、バ
イア、クーマエ、バーコリ、ミセヌム

第12章 ナポリ近郊のテッラディラヴォーロ（古代のカンパーニャ・フェリー
チェ「幸せの平原」）のカプーアなどの諸都市、スタビアエなどナポリ近郊の諸
都市

3巻 1783年出版

シェイクスピアからの引用、序文、マグナ・グラエキアへの旅と記述への手引
き

第1章 古代南イタリア（現在のナポリ王国、かつてのマグナ・グラエキア）
の地図、ナポリからシポントへの道のり（ベネヴェント、ルチェラ、マンフレドー
ニア、モンテ・サントアンジェロなどを經由）

第2章 プーリア平野 カンネからポリニャーノへの道のり

第3章 オトランド地方の地図、ポリニャーノからガリポリへの道のり（プリ
ンディジ、スタインツァーノ、レッチェ、ソレッタ、オトランド經由）

第4章 バジリカータ地方（古代のルカニア） ターラントからポリコロ（古代

のルカニア)まで (メタポンテ、ベルナルド、ポリコロ経由)

第5章 カラブリア地方北部 ポリコロからコリリアーノ (古代のシパリスの近辺)への道のり (ロッカ・インペリアーレ、ロゼート・カーポ・スプリコ (古代のロゼート)などを経由) ナポリ王国の貨幣の地図

第6章 カラブリア地方北部 コリリアーノからスクイラーチェ (古代のスコラキウム)までの道のり (メリッサ、ストロンゴリ、クロトネ、カポ・コロナ、カタンツァーロなどを経由) 1783年2月5日にメッシーナとカラブリアで起こった地震について

第7章 カラブリア地方南部 スクイラーチェからレッジョまでの道のり (ロッチェッラ・イオーニカ、ジェラーチェ、ロクリの遺跡、コンドヤンニを經由) 地震についての1783年3月12日の情報

第8章 メッシーナ海峡からネリーノの道のり (トロペーア、ニカストロ、コゼンツァを經由)

第9章 バジリカータ地方 カラブリアの境界からサレルノ公国までの道のり (ラゴネグロ、ポツラ、パエストゥムを經由)

第10章 ナポリへの帰路 (サレルノ、カーヴァ・ディ・ティレーニ、パガーニ、カプリ、ソレント、マッサ・ルブレンセなどを經由)

1591年ヴェネツィアで印刷されたポイティンガー図 (ローマ帝国の道路地図)の複製と解説

目次

第3巻所収の装飾模様の解説

ナポリとシチリアを襲った地震に関する1783年2～5月の報告 (ハミルトン卿の手紙の翻訳)

4巻上 1785年出版

『アエネーイス』からの引用、序文

シチリアの情勢・広がり・豊かさについて

目次

第1章 メッシーナを襲った地震について シチリアの地図 メッシーナの町と港、メッシーナからタオルミーナへの道のり

- 第2章 タオルミーナの遺跡、エトナ山への最初の旅、「百馬力」の栗の木
- 第3章 エトナ山周辺 カターナとその遺跡
- 第4章 エトナ山の古い溶岩、キュクロプスの岩、エトナ山への再度の旅、カターナからアドラーノへの道のり
- 第5章 シチリア島内陸部の旅行の続き カストロ・ジョヴァンニ（古代のエンナ市）など
- 第6章 テルミニ・イメレーゼ、パレルモ、パレルモの聖ロザリア祭
- 第7章 パレルモ周辺、カリーニ、セジェスタ
- 第8章 エリュクス山（現在のサン・ジュリアーノ山）への旅、シチリア島最西部、トラパーニ、ルバイルム（現マルサラ）、セリスンテ
- 第9章 アグリジェント
- 第10章 アグリジェントの遺跡の続き
- 第11章 アグリジェントの港と周辺の町、マルタ島への旅、マルタ島の港、要塞、遺跡

4巻下 1786年出版

『変身物語』からの引用、全巻についての序文、目次

- 第12章 マルタ島からシチリアへの帰路、シラクーザへの到着とその遺跡
 - 第13章 シラクーザの遺跡の続き（墓やカタコンベ）、イスピカの谷と洞窟、メッシーナへの帰還
 - 第14章 ヴァル・ディ・ノート、リーパリ島
- シチリアのメダルに関する解説

1783年の地震についての騎士分団長ドロミューの回想

全巻索引

国王允許

全体的な構想としては実際に行われた旅行の記録という体裁をとっており、「私たちの旅行者」「私たちの素描制作者」という言葉を常用することで、現地を踏破したということが強調されている。しかし、単なる日記ではなく、古代から同時代まで多種多様な文献の引用、文物の解説や考察なども織り交ぜられ

ており、版画集といってよいほど図版の枚数も多いため、融合的な著作ということができる。

3 シチリア編（第4巻）所収の記事から

『ピトレスクな旅』は、前半1～2巻と後半3～4巻とでは、記述内容や図版にかなりの変化が見られる。これにはラポルドが編集から離脱したことの影響もあるかもしれないが、それ以上に扱っている地域による違いと思われる。前半のナポリは、ラ・ランドのガイドにも含まれていたことから分かるように、すでに多くの人が訪れ、サン・ノンも実際に滞在した土地である。掲載内容は比較的狭い地域に限定して、詳しく掘り下げるものとなっている。

これに対して後半は、広い地域を網羅的に踏破しており、しかも図版は「景観」に力点を置いたものになっている。読者がこの地域を実際に訪れたことがないということを想定していることが違いを生んだ一つの理由だと思われる。そもそも編集者のサン・ノン自身がナポリよりも南のイタリアやシチリアには行ったことがないのである。現地特派員のドゥノン一行もそのことを念頭において文章や図版を作成していたと考えられる。

ここでは、第4巻から自然物の描写の例として巨大な栗の木、遺跡の描写の例として牢獄として使われた古代の石切り場を紹介した部分を訳出する。ちなみに、このシラクーザの石切り場で登場するディオニュシオス（紀元前432年頃-367年頃）は、太宰治『走れメロス』の暴君ディオニスのモデルである。



《図1》エトナ山の有名な栗の木 『百馬力』(VP4 巻上 図版21)

この木の全体はあまりにも巨大なので、とても単独の植物とは思われず、木立のように、あるいは、いくつかの株が繁っているように見えるだろう。しかし近くに寄ってみると、こんなに巨大な七つの株がこれほど近づいて育つことはあり得ないこと、これらの株がまったく対称に分かれていること、同じ中心を共有していることが分かる。つまり、これが一つの樹木であることに疑いはないのである。

このような何世紀も経た樹木は、エトナ山が気も遠くなるほど昔からあることを証言しているのではないだろうか。火山の溶岩に植物が生えることが可能になるのにかかる時間、発芽してからこのような巨木になるまでに経過した時間が計算できる。そして、このように古い木なのだからおそらく朽ちていった時間までも計算できるだろう。このような計算はきりがなく、合計したら途方もないことになるので、やってみようとも思われぬが。(原注 エトナ山や周辺の自然の古さを解明しようとしてこの種の計算をしたとて不確実なものに終わるだろう。エトナ山は頻繁に灰色の火山灰を放出しており、それが溶岩の上

に数ピエ〔1ピエは32.4cm〕の厚さの層となって積もっている。この灰は乾いた粘土のようなもので、水を含むと柔らかくなるので、火山から出たばかりでも植物が生えるのに適しているのだ。一般的に言って、溶岩の表面が変化して植物が生えることができるようになって苔でも育つまでには1世紀以上はかかると推測するのが正しいだろう。だが、最も新しい溶岩の上に、火山が放出する粘土性の灰が降ることで、大気によるゆっくりとした変化よりも100年早く植物が生えることを可能にする場合はどうだろう。シチリア島内のこの地域、あるいは島全体が、海上に現れるよりも以前から火山が存在していた確実な証拠がある。エトナ山の基部にあたる地域、特にアデルノやパテルノ、ラ・トレッツァで、カルシウム性の岩に覆われた溶岩が大量に広がっていることだ。これらの地域では、水や火の作用を受けた層が200トワーズ〔1トワーズは約1.95m〕の高さにあり、しかもそれは海岸から3000トワーズも離れている。アデルノ近くのカルカーチではカルシウム性の山の下に入り込んでいる溶岩の流れを今も観察することができる。そこでは、火山性の物質の上に、500ピエ以上の厚さで貝殻を含む岩が広範囲にわたって広がっている。

『ドロミュー騎士よりラ・ロシュフコー公爵に献呈されたエトナ山の火山性物質の総カタログ (*Catalogue raisonné des productions volcaniques de l'Etna fait et adressé par M. le Commandeur de Dolomieu à M. le Duc de la Rochefoucault*)』所収の論文18、19、20からの引用。)

また、この巨大さは環境の賜物でもある。日当たり、風、場所などだ。山のもっと高いところでは、同じ種類の樹木でもすらっとしており葉が多く、細く、別の品種に見えるくらいなのだ。また、栗の木は強いので、中心部は腐ったり硬化したりして死んでいても、周辺部や樹皮によって生きていることがあることも思い出そう。生きている部分が勢いよく育つので、幹の助けなしに大きな枝を生やして支えることができるのだ。

この驚異的な木の枝の広がり、株の大きさにはまったく見合っていない。しかし、それでも根元の直径は最大で78歩くらいある。つまり200ピエ以上(64m)だ。木の中心には溶岩を使って奥行7歩幅8歩高さ8歩のみすばらしい小屋が建てられている。こんなみじめなあばらやの代わりに、濃い緑の下に簡素な田舎風の祭壇があったなら、ドルイド教の神殿のイメージにぴったりだろ

う。野性的で人影のないこの森、古い木、すべてがガリア人の司祭たちと神秘的な儀式を思い出させる。(原注 この「百馬力」として知られる木の評判は落ちてきている。以前よりも教養があり観察力のある旅行者たちが、これは昔根元から伐採されており、古い切り株から新しい幹が出てきたただけだ、と指摘したからだ。こういうことはありふれていて、どこの森でも見られる。他所よりも植物が活発で力強いため、この新芽は元気で相当の大きさになったのであり、奇跡というものではない。エトナ山の栗の木が巨大であることについては、様々な旅行者の報告があるが、「百馬力」よりもずっと成長していておどろくべきものがいくつか存在するようで、一つの株しか持たないのに、周囲が76 ピエあるらしい。非常に巨大で周囲が40 ピエのコナラの木もあるという。)

この驚異的な自然の産物は、詩人たちが歌うエトナ山の黒いキュクロプス〔一つ目の巨人〕の途方もない大きさを想像させるのにふさわしい。さて、人類が巨人のような肉体から退化したのだとしても、この山の住民たちは大きな体格を維持している。残念ながら、ここの老人たちはほぼ全員盲目になってしまう。まだそうになっていない人たちも、充血して赤くなり痛そうなまぶたをしている。これは火山岩を含む空気を呼吸しているからか、揮発して腐食性を持った火山灰のために、この繊細な器官の繊維を痛めるからだろう。これらの埃は汗によって肌に付着するので、まるで鍛冶屋のようになる。とはいえ、彼らはまったく野蛮ではないし、たいへん善意と陽気さに満ちている。(原注 エトナ山の住民たちは、ファッセッリがいうような粗野で野蛮で無細工な人たちではまったくない。ここには、外国人がほぼ訪れない。人々が余所者によって墮落させられていない場所ならどこでもそうであるように、人は本来の姿にあり、いわゆる良い人、誠実で愛想がよく、親切な人々に出会った。彼らは明るい顔をしていて、山の澄んだ清い空気のために、元気で陽気で楽しい。女性たちはとても美しく、大変白い肌と生き生きとした眼をしている。男性たちは日焼けしているが、たくましく、健康で、とても気が利くし、率直で世話好きだ。一言でいうと、この村には少なからぬ人々が住んでいるが、素晴らしい人たちだ。

『リーデフェルのシチリアへの旅 (Voyage en Sicile de Riedefel)』138 ページより。)

雨が降ってきた。「百馬力」の下に入った私たちは、やむなく小屋のドアを蹴

破って、雨宿りをした。シロッコの風が平原の雲をすべて集めて山を覆ったので、山の姿は見えなくなった。雨は激しかった。きっと頂上は澄み渡り、平原からは湿気が消えるだろう。明日の日の出にはエトナ山の頂上にたどり着けるだろう。悪天候の中を私たちは進んだ。2時間たった頃、風が変わった。巨大な雲が丘から丘にかかり、眼下にはるか遠くまで広がっているのを、喜びとともに眺めた。

第4巻下所収 「シラクーザの石切り場の眺め、古代の石切り場の内部の眺め」
(図版113・図版114)¹⁰⁾



《図2》シラクーザの石切り場の外部からの眺め（VP4巻下 図版113）



《図3》古代の石切り場の内部の眺め（VP4 巻下 図版 114）

劇場の遺跡から右、すぐ近くに石切り場を使った牢獄 (Latomies) がある。(原注 この言葉の起源や語源を考えるに、Latomie ではなく、Lytomie とするべきであろう。「石を」を意味するギリシア語と「切り出す」から来るギリシア語を組み合わせると「石を切ること」を意味するのは $\lambda \iota \theta \omicron \mu \iota \alpha$ ¹¹⁾ である。ミラベル『古代のシラクーザ (Mirabel. Syrac. antiq.)』32 ページより引用。) この石切り場は古代シラクーザの歴史上有名どころだが、アテネの人々が敗戦のあと閉じ込められたとも、また、暴君が自分の敵を投げ込んだともいう。石切り場は広く、からっぽで、もともと古い町を建てるための石や資材をここから運び出したものが、後に巨大な恐ろしい牢獄になったことは疑いない。非常に広く、岩が垂直に切り出されており、同じ岩山でできた厚い壁に閉じられている。100 ピエの高さにある壁が、この広大な洞窟の入り口、玄関となっている。洞窟の最も深いところは有名な「ディオニュシオスの耳」だ。

時間はすべてを醜くしながら、最終的には破壊してしまうものだが、ここではまったく正反対の作用をしている。私たちが思わず想起してしまうような、かつて繰り広げられた悲劇的な光景は消え、豊かでピトレスクな場所だけが目

の前に残っている。天井で切り出された石はあちこちで崩れており、人間の仕事らしい規則正しさは消え去っている。また他方では、往時に牢獄に水を運んでいた水路が時とともに断ち切られて壊れ、今では水が滝のように落ちている。水は様々な色の小灌木の間を横切り、多種多様な野菜や果樹の植えられた土地を潤していく。

敷地に入って最初に目を捕らえるものは、洞窟の入り口だ。開口部は岩山の奥にある。三つの洞窟のうち最大のものは硝酸塩を製造する職人たちがいつも使っている。この職人たちは、キュクロプスのように真っ黒で、ウルカヌスの鍛冶場の絵を想起させる。

二つめの洞窟は、奥まっっており、さらに神秘的で奇妙だ。この石切り場の天井は岩でできた柱だけで支えられている。この粗削りな円柱は、長い年月の間に傷み、巨大な鍾乳石のようになって洞窟の入り口をふさいでおり、日の光は弱く切れ切れにしか差し込まない。この穴倉は広大で、がらんどうなために音がよく響く。どんな小さな音も聖域の静けさを破るかのように思われる。これは人里離れた場所に建てられた静寂の神殿だ。

石切り場の三つめは、「ディオニュシオスの耳」と呼ばれる。最も狭く、さらに暗く、威圧的だ。これはシビラの巫女の洞窟だ。私たちは身震いしながら巫女に尋ね、神託を聞くような心地になる。ここ以上に玄妙で鋭敏に反響する場所はないだろう。どんなに小さな物音もすべて聞こえるように響く。こだまというより楽器の音のようで、とくに入り口ではもっともよく反響して鳴り響く。

第4巻下所収 「シラクーザの石切り場内部の第二の眺めと、ディオニュシオスの耳の名で知られる石切り場の入り口」(図版115・図版116)¹²⁾



《図4》シラクーザの石切り場内部の第二の眺め (VP4 巻下 図版115)



《図5》石切り場「ディオニュシオスの耳」の入り口 (VP4 巻下 図版116)

当地でグロット・デラ・ファヴェツラ（話す洞窟）と呼ばれるこの有名な洞窟の評判、特異な形状、洞窟をとりまくすべてのピトレスクさは人をひきつけずにおかないし、くまなく歩きまわることを興味深くまた好ましいものとしてゐる。しかし、それは私たちがどうやって洞窟はできたのかを忘れることができればの話だ。巨大な掘削事業を可能にしたぞっとするような悪事の数々、ここが手段となり舞台となった不幸の数々を思えば、魅力は消え、牢獄、苦役、拷問、暴政しか見えなくなるだろう。逃げ出したいくなり、出口でディオニュシオスに出くわすのではないかと怯えるだろう。

広くて暗い牢獄の奥を探索するには、松明をつけなければならない。ここを作らせたのはこの僭主だとされている。見るべきものは奥行80歩、幅12ピエ、高さ50ピエの穴である。穴は平面図はS字形で、断面は大きな鐘の形になっている。下から高さの四分の三までは一定の割合で狭まってゆき、ヴォールトもしくは低半円式の天井の中心はまさに鐘のような形になるように、なだらかに傾斜してはっきりと閉じている。

側面の右手真ん中には、岩を掘ってつくられた四角い小さな部屋状の空間がある。奥行10ピエ、幅4ピエだ。この地方で広く知られる伝説で、シラクーザの案内人たちが旅行者に必ず繰り返す話だが、ここに僭主ディオニュシオスがこっそりやってきて、閉じ込めた囚人たちの様子を聞いたりのぞいたりしたというのだ。案内人たちは、声もどんな小さな物音も洞窟の中でここが一番聞こえるのですよと言う。とはいえ、この小さな特別の穴は、単に何人か作業員が居られるようにするだけだったのではないだろうか。掘削がこの深さまでだった時に使われたもので、当然ながら、さらに下へと掘り進められたときに使われなくなっただけだと考えるほうが、ありそうな話だ。

洞窟の内部は、時の経過で8から9ピエの土が降り積もっているせいでおおいに和らげられているが、いまだ本当に驚くべき反響だ。側面は、大変規則正しく削られており、何世紀にもわたって湿気が生じさせた苔や緑がかった鍾乳石に覆われている。

これらの壁には、足場や輪を固定するのに使えそうな穴のようなものが石に直接穿たれているのが見える。しかし、使い道を同定するのは難しそうだ。もしも囚人たちをつなぐのに使ったのだとしたら、15ピエ以上の高さの場所に吊

るしたのだということになる。しかし、壁に開けられた穴こそ、この大きな牢獄が長時間かけて掘られたと考える証拠になる。石切り場の底が掘り下げられたために、石に掘られた穴が高い場所に残ったということではないだろうか。こう考えた方が、このあたりで言われているようなこの大きな洞窟はディオニュシオスが囚人たちの秘密を知るために作った牢獄だという説よりも自然ではなからうか。

少し注意して場所を検分するだけで、地元の説を論破できるだろう。古いからというだけで昔からの間違いを盲目的に信じたりしなければの話だが。少なくとも、人気があるだけで歴史的な裏付けなどまったくない説なのだ。実際、歴史家たちはこの僭主が宮殿の近くに牢獄を持っていて国事犯たちの計画を知るために彼らを拷問させていたことを報告している。しかし、そもそも石切り場は宮殿にさほど近くはない上、もしも石切り場が拷問場所とされていたのなら、こんな深さには掘っていないだろう。こんなにまで掘るには何世紀もかかる。暴君というのは自分の恐れや道楽のためには出来るだけ手っ取り早い手段を求めるものだ。それに、この洞窟では、二、三人の人が話ただけで音が混ざり合って非常に大きな音になり、混乱してまったく聞き取れないような騒音になってしまうのだから、こんなところで会話と声を理解して聞き分けて話についていくなどまったく不可能なのだ。(原注 この有名な洞窟の形状は偶然の産物でなんら計画的なものではなかった可能性が高いと思われるが、意図的に造られたものかもしれない。ここの反響、いまだによく響くことは実に探求に値することは確かである。この特異性のゆえに、ここを舞台にした人気のある物語が様々なに生み出されたことは驚くようなことではない。しかし、実はまったく自然なことだにすぎない。それが重なって長くなり、風変わりな効果を生み出しているのである。音を響かせる感度の良さに加えて、異常に音量を大きくし、極端に増幅させる。ここで、キルヒャー師の記述を紹介させていただく。大変興味深いものである。[以下略]¹³⁾

また、歴史書によれば、この広大な牢獄は大衆を対象にしており、今のガレー船のようなもので、大罪人や有名な囚人のためのものでは断じてなかった。ディオニュシオスはデイトラムボス(酒神讃歌)作家の詩人ピロクセノスが大胆にも自分の詩を酷評したためにここに投げ込んだことがあったが、拷問するよ

りも侮辱することで罰しようとしたのだと思われる。数日後、詩人は再び暴君の食卓にいて、王の詩に講評を求められたが、石切り場に戻してくれと言ったという。

ここまで述べてきたように、この有名な洞穴は、もともとは資材を切り出すために掘られただけで、その後どうやら牢獄として利用し、戦争に敗れて奴隷となった囚人たちを閉じ込めたのであろう。これらの不幸な人々は公共建築のために働かされて、ここで一生を過ごし、ここで結婚して自分たちのような子供を残すことを余儀なくさせられたのだ。もちろん生存に必要なものを供給しなければならず、そのために水を運ぶための水道橋を造らなければならなかったのだろう。そして、水を配分するためのレンガの水路を造る必要もあっただろう。今も石の間にその痕跡がとどまっている。

石切り場の別の端にある硝酸塩を製造している洞窟では、同じような方法で掘り始められたものの途中で放棄された穴が見られる。また、アクラディーネの町の石切り場でも、同じ形の天井が見いだされる。「カプチン会の森」と呼ばれるところにあるが、これについては次章でその眺めを紹介する。

4 結び — 「景観」を伝えるための技術

この書籍は、その大きさや重量からも明らかであるように、持ち運んで使用するガイドではなく、鑑賞用の書物である。しかも、特に後半については、掲載された土地を見たことがなく、おそらく見る可能性も極めて低い人々が読者として想定されている。『ピトレスクな旅』と銘打っているが、「ピトレスクさ」（絵になるような趣）が図版と記述だけで読者に伝わるかどうか为本としての成功の鍵を握っている。ここでは当時の「景観画」と同じような効果が目指されていたのではないだろうか。

18世紀のイタリアでは「景観画」と言われる種類の風景画が大量に制作される。カナレットやグアルディが特に有名で、これらの絵画は *veduta*（ヴェデュータ）と呼ばれる。これらの風景画の大きな目的は、旅の記憶を持ち帰り、故郷の人々に説明して共有することであった。

本書後半の記事は、「景観画」ならびにそれを見せながら自分の経験を語る旅

行者の役割を果たすことが期待されていると考えられる。多くの図版はできるだけ臨場感を感じさせるように工夫されている。特に、ほとんどの構図に人間が描きこまれているが、これはサイズ感が伝わるようにするとともに、自分もそこにいるような気持ちになるための演出でもあるだろう。また、文章は図版と照らし合わせながら読むことのできる内容となっている。さらに図版に描かれた以上の情報も相当詰め込んでおり、現地に行って案内人から話を聞くような印象を与える。

また、訳出した部分に共通して非常に興味深いのは、語り継がれてきた通説を合理的に検証し、不合理な点を論理的に否定することに大きなエネルギーが注がれていることだ。この部分があることで、その場に居合わせなかった人である読者も、議論に参加できているような気持ちにさせる効果を生み出していると考えられる。

18世紀屈指の旅行記と位置付けられる本書であるが、図版と文章が一体となって、描かれた場所に行く機会が恐らくないであろう読者も疎外感を味わわずに能動的に鑑賞できるような工夫がなされている。単に豪華なだけではなく、啓蒙の世紀らしく、知的好奇心を刺激する気配りに満ちた書物でもあるのだ。

註

- 1) 『国立西洋美術館報』No. 46 (Apr. 2011-Mar. 2012), 2013, 新収作品一覧, p. 50. 国立西洋美術館では4巻本として登録されている。
- 2) <https://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/saintnon1781ga> (2020年3月2日アクセス) 本稿で使用した図版は、このサイトからダウンロードしたものである。
- 3) 本書は、図版の完成度の高さから風景画の展覧会で関連資料として展示されることも多い。近年の国内の展覧会では『ユベール・ロベール 時間の庭』展(国立西洋美術館、2012年)に出品された。
- 4) サン・ノン師については、Georges Wildenstein. "L'Abbé de Saint-Non, artiste et mécène." *Gazette des Beaux-Arts*, 6th ser., 54 (November 1959), pp.225-244. を参照。
- 5) (exp.cat.) *Dominique-Vivant Denon. L'œil de Napoléon*, RMN, 1999, pp.69-70.
- 6) Jean-Baptiste-Claude Richard Saint-Non, *Voyage pittoresque ou Description des royaumes de Naples et de Sicile*, tome I, Paris, 1781, p.i. 以下では、この書物はVPと訳すことにする。
- 7) Jérôme de La Lande, *Voyage d'un françois en Italie, fait dans les années 1765 et*

1766, Venise, 1769.

- 8) Jean-Pierre-Louis-Laurent Houël, *Voyage pittoresque des isles de Sicile, de Malte et de Lipari : où l'on traite des antiquités qui s'y trouvent encore, des principaux phénomènes que la nature y offre, du costume des habitans, et de quelques usages*, 1782-1787.
- 9) VP, tome IV, pp.49-51.
- 10) VP, tome IV, pp.287-288.
- 11) この綴りのギリシア語は管見の限り見つからないが、原文のとおり書き起こすこととした。また、引用元の情報は部分的だが、ヴァンサン・ミラベルの著作を指していると思われる。
- 12) VP, tome IV, pp.289-292.
- 13) 原文では以下にアタナシウス・キルヒャー（1601–1680）の著作の一部が引用されているが、訳出は省略する。書誌情報は、Kircherius, Lib. IX, ch.IV. としか記載されていないが、1638年に出版された『マルタの円鏡』（*Specula Melitensis encyclica*）と思われる。